

売薬の意匠あれこれ 〈その25〉 売薬のポスター【その②】

一般社団法人 北多摩薬剤師会会長 平井 有 (ひらい・たもつ)

今回は前回に引き続き明治期～大正期にかけての売薬のポスターを紹介します。現代では広告の媒体というとインターネット通販サイトが頭に浮かびますが、パソコンやスマートフォンが普及していなかった時代の広告というと昭和期にはテレビやラジオ、そして紙媒体では新聞、雑誌の広告欄や折り込みチラシ、ビラなどが主流でした。

このチラシやビラは江戸時代にはお客さんを引っばってくる、利益を引きよせることから「引札(ひきふだ)」と呼ばれていました。

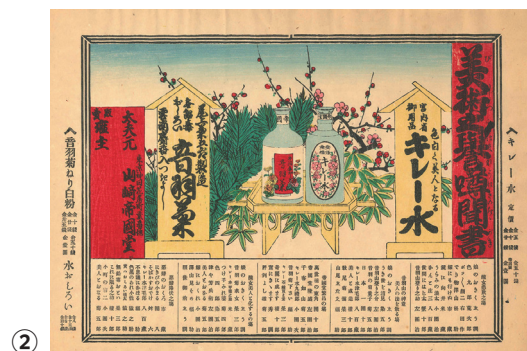
今回紹介する明治期から大正期にかけてのチラシは、江戸時代の雰囲気が残っています。元々日本には浮世絵に代表されるカラーで多色刷りの印刷技術の伝統があり、それにそれまでの和紙に加えて西洋紙が取り入れられ、また絵具にもそれまでの日本画に用いる岩絵具(いわえのぐ)にかわって油絵具を用いたり、印刷技術も木版から西洋式活版印刷が取り入れられ、と進歩が加わり21世紀の現代でも非常にきれいな形でポスターが残されています。



④



⑤



②



③



⑥

①ウルス

「ウルス」は江戸時代(文化9年・1812年)に発売された洋名を用いた最初の売薬といわれていますが、その実は生薬からなる下剤で「(おなかを)空にする」の「空」の字を分解して「ス」を付けたいかにも洋語(オランダ語)らしい響きをもった造語で、日本人が西洋文化に弱い点は現代も江戸時代も変わらないようです。

②キレー水

歌舞伎の舞台演出を想起させるデザインの広告です。キレー水はニキビ、吹き出物などに用いる液状の治療薬(例:イオウカンフルローション)だったようで、キレーはきれいになる意味を洋風にアレンジしたものと思われます。

③胃活

現在のパンシロン胃腸薬の前身のシロン胃腸薬、さらにその前身の胃腸薬の「胃活」の引れで、明治36年(1903)の年中行事が書かれた暦が印刷されています。

④回生散・金龍丸

明治政府により、それまでの身分制度(士農工商)が廃止され、皆が文明開化の世を走る姿が描かれています。右上部に「士農工商」の文字が書かれており明治初期の引札と思われます。

⑤ドクトリ丸

絵巻物などにも見られる鳥瞰図的な精微な技法で描かれた引れで、中央に商品名の書かれた掛け看板が配置されています。「ドクトリ」は「ドクトル(医師・ドクター)」にも掛けているようですが、諸病の原因の体内に溜まった毒を取る(去る)薬という意味もあります。

⑥「金の成る木(き)」

富山の置き薬(配置売薬)業者が土産に置いて行った「富山絵」の一つです。軸木には「慈悲深き」。周りの枝には「よろず程のよき」「しよじき(正直)」「朝起き」「潔き(いさぎよき)」「辛抱強き」「油断なき」「養生良き」などの「き(木)」の付く言葉が書かれて一種の人生訓、道德観を示し、そうすることで自然と金がかかるというわけです。なお古事記に書かれた神話の「因幡の白兔」に現れる蒲の穂で傷ついたウサギを治療した「大国主(おおくにぬしのかみ)」「(いわば古代のくすし)は、後に大国(おおくに)はダイコクとも読めることから同じ音である七福神の柱の大黒天(大黒様)と習合した結果(神仏習合)、薬関係の引札には大黒様が多く描かれるようになります。